

文学性の生成モデル

橘 高 眞一郎

〔抄 録〕

文学性とは何なのか。その生成過程はどのようなものなのだろうか。本稿では、まずロシア・フォルマリズムの V. Shklovsky の異化やプラハ言語学派の R. Jakobson の詩的機能を基にした D. Miall and D. Kuiken のモデル、D. Sperber and D. Wilson の関連性理論 (詩的效果) や認知科学でいう認知的ずれを取り入れた内海のモデル、スキーマ理論を基にした P. Stockwell のモデルを比較検討し、それら3つのモデルが補完的な関係にあることを指摘する。次に J. Kristeva の提唱した間テキスト性が、それらのモデルが相互作用するための文学作品の認知という基盤を提供すると同時に、創造的な読み (間読み性) を生成することを指摘し、そのことを考慮した間テキスト性基盤モデルを提案する。最後に、そのモデルを用いて、E. Hemingway の短編小説を分析し、文学性が生成される過程を検証する。

キーワード 異化、詩的機能、詩的效果、間テキスト性、間読み性

1. はじめに

文学性 (literariness) とは何か。それはどのような過程により生成されるのか。この問題に初めて真正面から取り組んだのが Shklovsky であった。彼は、文学性とは審美的価値 (aesthetic value) であり、異化 (defamiliarization) がその生成過程であると考えた。

The technique of art is to make objects “unfamiliar,” to make forms difficult to increase the difficulty and length of perception because the process of perception is an aesthetic end in itself and must be prolonged.⁽¹⁾

(芸術の持つ技巧は対象を「見慣れなく」すること、知覚するのが困難で時間がかかるように形式を難解にすることである。その訳は知覚の過程というのは審美的目的そのものであり、引き延ばされなくてはならないからである。)

Shklovsky の後、Jacobson は、言語の詩的機能 (poetic function) が文学性を生成すると主張した。

...the characteristic poetic function consists in foregrounding and estranging language and meaning consciously and creatively against the background of non-literary language, by devices of deviation and also repetition or parallelism. For Jacobson, patterns of repetition, on all levels of sound, syntax, lexis and meaning are the most important feature of poetic language, in many languages if not all.⁽²⁾

(……典型的な詩的機能は、非文学的言語を背景として、逸脱や反復ないし並行法という装置により、意識的にかつ創造的に言語や意味を前景化したり異化することにある。ヤコブソンにとって音韻、統語、語彙、意味、のあらゆるレベルでの反復の型こそが、全ての言語ではないにしても、多くの言語において、詩的言語の最も重要な特徴である。)

認知科学 (cognitive science) の発達は、文学性の生成過程の解明に人間の認知過程の分析という新しい視点を提供した。特に関連性理論 (relevance theory) やスキーマ理論 (schema theory) は文学性の生成過程の解明に大きく貢献した。

本稿では、まず文学性の生成過程のモデルとして、Miall and Kuiken (1999)、内海 (2007)、Stockwell (2002) のモデルを取り上げて比較検討し、次にこれらのモデルが機能する基盤としての間テクスト性を考慮したモデルを提案する。

2. 文学性生成に関する先行モデル

2.1. Miall and Kuiken のモデル

Miall and Kuiken は、文学性を構成する要素を抽出するために、Coleridge の詩 “The Nightingale” を30名の被験者に読ませ、彼らが感動した部分についてコメントさせた。彼らの一人は感動した部分として “No cloud, no relique of the sunken day / Distinguishes the West...” を指摘し、次のようにコメントしている。

Because of the way that he says a “sunken day” and there is “no relique”, so there’s nothing there. I like it because it’s unusual to see the days sunken, instead of the sun. I think that’s what it gives it its sense of desolation. ... It’s just kind of a nothing time, well not a nothing time but a time that can’t be described, that can’t be categorized.⁽³⁾

(詩人が「沈んだ一日」とか「遺跡はない」という風に言っているから、何もないのだ。太陽じ

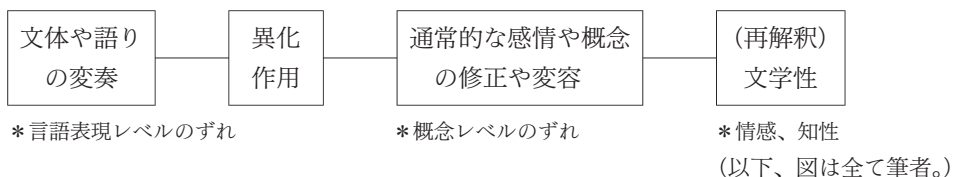
ゃなくて、日々が沈んだのを見るのは普通じゃないから、気に入っている。そんな風に言うから孤独感が出るのだ。時間など取るに足らないというか、そうではなく、言い表せないような、分類できないような時間なのだ。)

このようなコメントから彼らは、文学性の生成過程を説明する 3 要素モデル (three-component model of literariness) を示した (以下、M モデル)。

1. The first component of literariness, ..., is the occurrence of stylistic variations that are distinctively (although not uniquely) associated with literary text:...
2. The reader has been struck by these stylistic variations... The second component of literariness is the occurrence of this type of defamiliarization.
3. The reader is prompted to reflect on the implications of this defamiliarizing phrase, Thus the third component of literariness is the modification or transformation of a conventional feeling or concept.⁽⁴⁾

- (1. 文学性の第一要素は文学的テキストに (独特ではないが) 明確に関連した文体的変奏の発生である。
2. 読者はこうした文体的変奏によって驚く。……文学性の第二要素はこのような異化の発生である。
3. 読者は異化を引き起こしている語句の含意をじっくりと考えるように仕向けられる。……そういう訳で文学性の第三要素は通常的な感情や概念の修正ないし変容である。)

(図1) Mモデル



Miall and Kuiken による文学性の定義からは、彼らが Shklovsky や Jacobson らの研究の流れを汲んでいることが容易に読み取れる。

Briefly, literariness is constituted when stylistic or narrative variations defamiliarize conventionally understood referents and prompt reinterpretive transformations of a conventional feeling or concept.⁽⁵⁾

(簡単に言えば文学性は、文体や語りの変奏が通常理解されている指示物を異化し、通常の感情

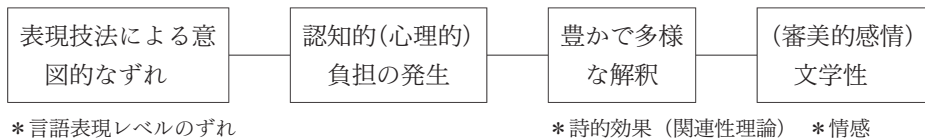
や概念の再解釈的な変容を促す時に構成される。）

2.2. 内海のモデル

内海は、メタファーによる文学性の生成過程を説明するために Miall and Kuiken のモデルに関連性理論 (relevance theory) の知見を加えた「ずれの解消モデル」(incongruity resolution model)を提案した。例えば、My love is a red, red rose. というメタファーでは、読み手が my love ≠ a red rose という認知のずれ（認知的負担）を解消する過程で、my love と a red rose の間の類似点（創発特徴：emergent feature）を発見して驚く（豊かで多様な解釈を得る）ことにより文学性が生成されるとした。このモデルは、メタファーのみならず、言語表現一般による文学性の生成過程の説明にも極めて有用であると考えられるので、本稿では、言語表現一般に適用された「ずれの解消モデル」を内海モデルと呼ぶことにする（以下、Uモデル）。

1. 表現技法に基づいて生じる意図的なずれによって、受け手に認知的負荷（処理労力、心理的緊張）が生じる。
2. 認知的負荷を軽減するような（部分的にずれを解消するような）豊かで多様な解釈を得ることによって表現効果が生じる⁽⁶⁾。

（図2）Uモデル



内海は、文学性とは詩的效果 (poetic effects)⁽⁷⁾によって読者の心中に喚起された審美的感情群と定義し、それは一般的認知機構の阻害を克服する過程で生じると説明した。

まずは詩的（審美的）効果の定義であるが、これはなかなか難しい問題である。直感的には、感情、感覚、美的価値などに関連した、明示的に命題として表象することのできないような効果であることには異論はないであろう。より具体的には、文学作品やその中の文学表現（より広く言うと、芸術作品）のあり方を味わうように捉えたときに心の中に喚起される特別な心的状態・感情で分析されている審美的感情群と、一応、定義することができる。……詩的效果は一般的に用いられる認知機構（知覚、カテゴリー化、記憶、注意）がスムーズに作動しない、つまりこれらの認知機構の働きが邪魔・妨害されたときに喚起されるとする説が有力である⁽⁸⁾。

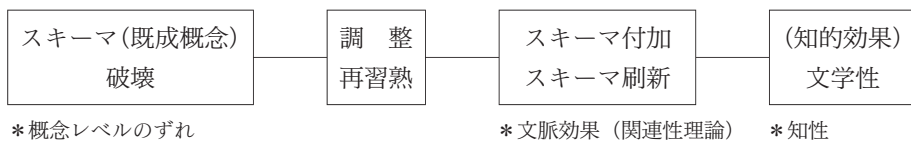
2.3. Stockwell のモデル

言語表現レベルではなく、概念レベルのずれが生じた場合には、既成概念と新概念が対立し軋轢を生じるため調整の必要が生じる。その結果、読者の世界観が影響を受ける。Stockwell は、スキーマ理論を用いて、このような文学性の生成過程を説明している（以下、Sモデル。なお引用文は筆者が改編）。

1. Surprising elements or sequences in the conceptual content of the text can potentially offer a schema disruption, a challenge to the reader's existing knowledge structure.
2. Schema disruptions can be resolved either by schema adding (the equivalent of accretion), or by a radical schema refreshment—a schema change that is the equivalent of tuning, or the notion in literature not so much of defamiliarisation as 'refamiliarisation'.⁽⁹⁾

- (1. テクストの驚愕すべき要素や展開が潜在的なスキーマ破壊、つまり読者の既存の知識構造に対する異議、を与える。
2. スキーマ破壊は、スキーマ添加（増加に同じ）や急激なスキーマ刷新—調整あるいは異化というほどではないにしても「再習熟」といった文学における概念であるスキーマの変化に相当するもの、によって解消される。）

(図3) Sモデル



Stockwell は、文学性とは概念レベルのずれとその調整による文脈効果 (contextual effects)⁽¹⁰⁾ によって生成されると考えた。

This is not a definition of literature as a whole, but a definition of 'good' literature, or literature which is felt to have an impact or effect.⁽¹¹⁾

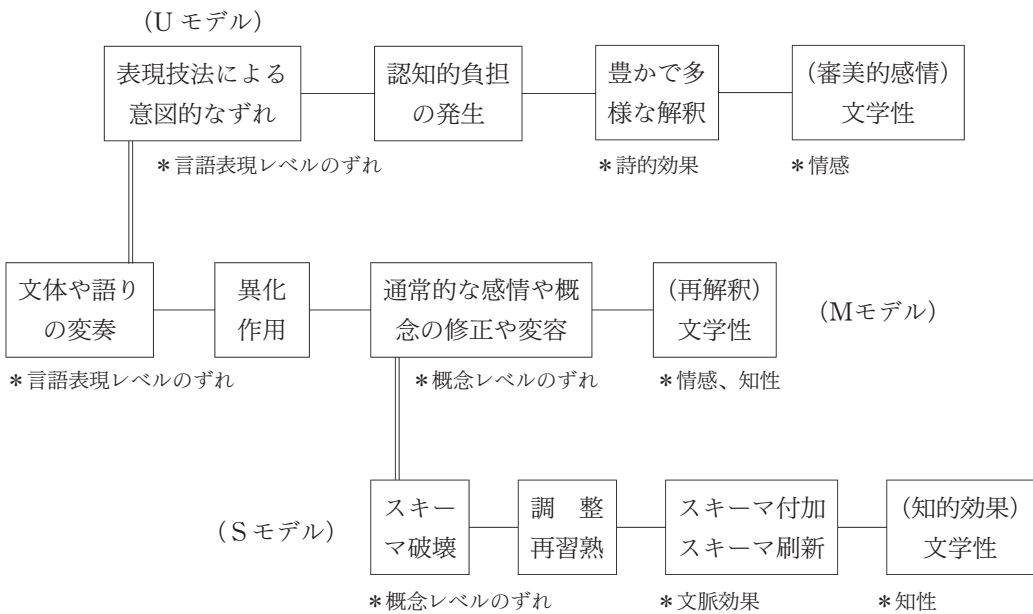
(上記のことは文学全体の定義ではないが、「優れた」文学、換言すれば衝撃や効果があると感じられる文学の定義なのである。)

2.4. 各モデルの比較検討

上記3モデルの中で、Mモデルは文学性の生成過程を説明する「全体的枠組み」を示してお

り、中核的モデルと考えてよい。一方、Uモデルは、Mモデルの「文体や語りの変奏」に焦点を当て、Sモデルは、Mモデルの「概念の修正と変容」に焦点を当てており、それぞれMモデルを補完するモデルとなっている。換言すれば、Mモデルが示した文学性の生成過程のうち、Uモデルは「言語表現レベルのずれ」が文学性（審美的感情群）を生成する過程を、Sモデルは「概念レベルのずれ」が文学性（知的効果）を生成する過程を詳述している。Mモデルは、文学性の生成過程全般を示す優れたモデルであるが、「言語表現レベルのずれ」のみを文学性生成の出発点としている点や文学性の内包する「情的」側面と「知的」側面をひとまとめに扱っている点に難点がある。従って文学性の生成過程の全貌を示すには、中核となるMモデルにUモデルとSモデルを組み込んだ複合図を示す必要がある。

（図4）文学性の生成過程の全貌図



3. 間テキスト性基盤モデル

ところで上記3モデルは、分析の対象が文学作品であることを前提としている。しかし、文学作品のみに特徴的な文体が存在しないことは自明である。

In general, the literary features we have mentioned are identifiable in relation to the norms of language or narrative that are apparent in ordinary discourse (e. g., the language and narrative forms used in newspaper articles), ...⁽¹²⁾

（一般に、我々が述べてきた文学的特徴は、通常の談話に現れる言語や語り（例えば、新聞記事

に使われる言語や語り)の規範と照らしてみても確認できるのである。……)

そこで Miall and Kuiken は、読者はあるテキストを文学作品であると期待して読むから、「文体や語りの変奏」に深い意味が隠されているだろうと注意深く読むようになり、その結果、文学性が認知される、と主張した。

However, for literary readers, attention is captured and held, and, for a moment, familiar and conventionally understood referents seem less familiar, as though there is something “more” to them than can be immediately grasped (defamiliarization). In response, as readers reflect on the implications of a defamiliarizing expression, their reinterpreted effort modifies or transforms their conventional feelings or concepts.⁽¹³⁾

(しかし、文学の読者にとって、注意が引きつけられた途端、見慣れた普通に理解されていた指示物があまり見慣れないものとなるのである。それはまるで、即座に把握される以上の何かがあるかのようである(異化)。その結果、読者は異化を引き起こすような表現の含意をじっくりと考えるようになり、再解釈の努力が通常感情や概念を修正したり、変容させるのである。)

彼らは、読者が何によってあるテキストを文学作品と認知するのかについて、一切触れていないが、それはおそらく間テキスト性 (intertextuality) によると考えられる。間テキスト性はテキストの解釈に大きな影響を与えており、あるテキストが文学作品であるか否かの認知は間テキスト性に依存しているということは従前から指摘されている。

Basically, it [intertextuality] can be defined as utterances/texts in relation to other utterances/texts. So even within a single text there can be, as it were, a continual ‘dialogue’ between the text given and other texts/utterances that exist outside it, literary and non-literary: either within that same period of composition, or in previous centuries. Kristeva argues, in fact, that no text is ‘free’ of other texts or truly original. ... For the reader, therefore, intertextuality functions as an important frame of reference which helps in the interpretation of a text.⁽¹⁴⁾

(基本的に、間テキスト性は、ある発話/テキストと他の発話/テキストとの関係と定義できる。たった一つのテキスト内でも、同じ時期あるいは数世紀前に書かれたにせよ、当該のテキストとその外側に存在する文学・非文学の他の発話/テキストとの間には、いわば絶え間ない「対話」がある。実際、クリステヴァが述べているように、どんなテキストも他のテキストから「自由」ではないし、真に独創的でもないのだ。……読者にとって、間テキスト性はテキストの解釈に役

立つ重要な指示棒として機能する。)

THERE ARE MANY WAYS by which one text can refer to another: parody, pastiche, echo, allusion, direct quotation, structural parallelism. Some theorists believe that intertextuality is the very condition of literature, that all texts are woven from the tissues of other texts, whether their authors know it or not.⁽¹⁵⁾

(あるテキストが別のテキストに関係するには多くの方法がある。例えば、パロディー、文体模倣、主題模倣、間接的言及、直接的引用、構造的並行関係である。間テキスト性はまさに文学の条件であり、作者がそれを知っているようがいまいが、あらゆるテキストは他のいろいろなテキストの繊維で織りなされていると信じる理論家達もいる。)

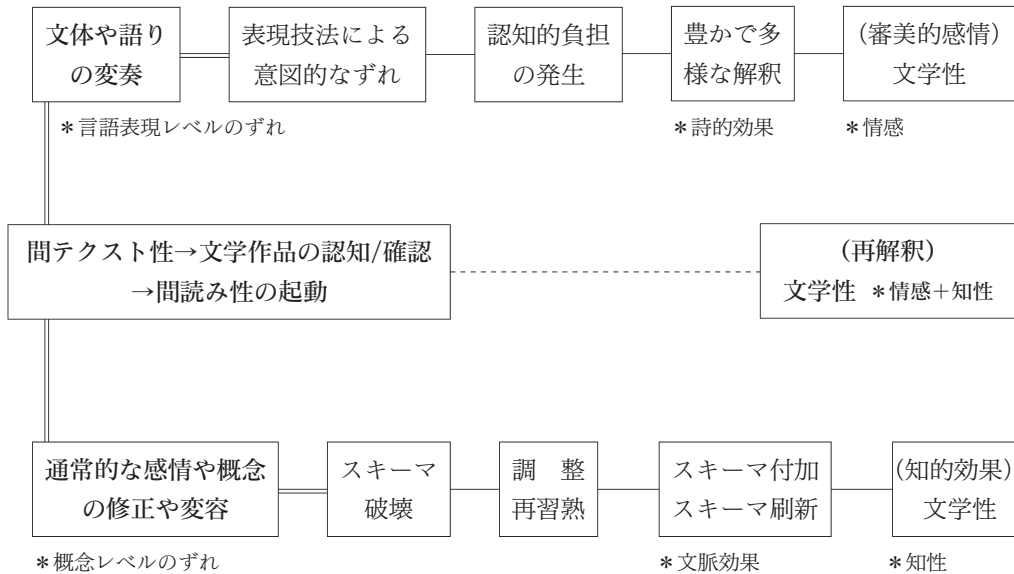
また間テキスト性の概念は、必然的に読みの問題へと拡張していく。読解とはテキストを再構築（再創造）すると同時に、読者自身の経験世界も再構築（再創造）していく過程でもある。

テキストという空間は創造と流動の空間であり、記号との戯れの空間である。この空間を生きることにより、読者には自由と創造の快樂がもたらされる。テキストを読むことはテキストを再生産することであり、テキストの快樂とはテキストを生きること他にない⁽¹⁶⁾。

この読みの問題は、間読み性 (Fr. interlectuarite; Eng. interlectuality) と呼ばれる⁽¹⁷⁾が、UモデルやSモデルで示された「審美的感情群」や「知的効果」は間読み性という読者の創造的活動によって生じたものである。そこで、間テキスト性による文学作品の認知まで組み込んだ文学性の生成モデルとして間テキスト性基盤モデル (Intertextuality-based Model. 以下、Iモデル) を示すと、次のようになる。

1. 間テキスト性により文学作品の認知/確認が行われ、間読み性が起動する。
2. 言語表現レベルや概念レベルの意図的なずれ（異化）によって、認知的負荷（処理労力、心理的緊張）が生じる。
3. 認知的負荷を解消するような調整が行われ、文学性（審美的感情群+知的効果）が生成される。

(図5) 間テキスト性基盤モデル (Iモデル)



4. テキスト分析

本稿では、文学的テキストを、まず言語表現レベルのずれ (Uモデル)、概念レベルのずれ (Sモデル) の観点から分析し、それらのずれの解消が、間テキスト性を基盤にして行われることを検証する (Iモデル)。分析に用いたテキストは、Ernest Hemingway の *In Our Time*. (我らの時代に) の中の “Indian Camp” (インディアン部落) という短編 (約6,000語) で、主人公のニック少年がインディアン部落で体験した生と死がテーマである。内容の概略は、ニック少年の父親 (医者) が、帝王切開で母子の命を救ってやるすぐ側で、足に大けがをした夫が妻の産みの苦しみの悲鳴に耐えきれず自殺してしまい、思いもかけず生と死の現場を一度に経験したニック少年は人生の不条理から大きな衝撃を受ける、というものである。

4.1. 言語表現レベルのずれ (Uモデル)

まず、最初に生 (出産) に関わる言語表現 (下線部) が高い密度で反復され (異化)、認知的負荷が生じる。(下線部は筆者。)

Inside on a wooden bunk lay a young Indian woman. She had been trying to have a baby for two days....

“This lady is going to have a baby, Nick,” he said. “I know,” said Nick. “You don’t know,” said his father. “Listen to me. What she is going through is called being in

labor. The baby wants to be born and she wants it to be born. All her muscles are trying to get the baby born. That is what is happening when she screams.”

次に、死（自殺）に関わる言語表現（下線部）が、生に関わる言語表現と同じように高い密度で反復され、認知的負荷はますます大きくなる。（下線部と角括弧内の補足・説明は筆者。）

“Why did he kill himself, Daddy?” “I don’t know, Nick. He couldn’t stand things, I guess.” “Do many men kill themselves, Daddy?” “Not very many [kill themselves], Nick.” “Do many women [kill themselves]?” “[They] Hardly ever [kill themselves].” “Don’t they ever [kill themselves]?” “Oh, yes. They do [=kill themselves] sometimes.”

... “Is dying hard, Daddy?” “No, I think it’s [=dying is] pretty easy, Nick. It all depends.” ...

In the early morning on the lake sitting in the stern of the boat with his father rowing, he felt quite sure that he would never die [=kill himself].

Hemingway の短編において、反復（並行法：parallelism）が多用されていることはよく知られている。ここでも生と死に関わる語彙が高密度に反復され、明らかに通常の文体とのずれ（異化）が生じている。従って読者は、ここから「何かある」と感じ、生と死の対照から、言い知れぬ不気味さ、不条理さを感じ取る（審美的感情）。

4.2. 概念レベルのずれ（Sモデル）

子供の誕生は、特に難産であった場合には、喜びも大きいのが普通であるから、読者は<子供の誕生は喜び>という一般概念（スキーマ）を持っている。しかしここでは、子供の誕生の場面にいた夫は、それを喜ぶどころか、妻の産みの苦しみを自分の生の苦しみに重ね合わせて自殺をするのであるから、<子供の誕生は苦しみ>という異常な概念が提示され、概念レベルのずれが生じる（スキーマ破壊）。読者は、この概念レベルのずれに相当な違和感を覚える。そこで、スキーマの調整 (tuning) が行われ、その結果、不条理なインディアンの夫の自殺に対する理解の試みが行われる（知的効果）。この過程は、例えば、次のような評論からも理解できる。（本稿では、嶋（1975）の評論を参照する。以下、同じ）

……足に受けた大けがが、そういう絶望の深い淵からの脱出の不可能性を痛感させ、それが彼の暗愚な頭のなかで、妻の悲鳴と不可分的に結びついて、絶望的意識をいっそう決定的なものにつのらせた結果、彼はその苦悩に耐えきれず、死によって自己を清算せずにはいられなかったの

あろう⁽¹⁸⁾。

4.3. 間テキスト性の基盤 (Iモデル)

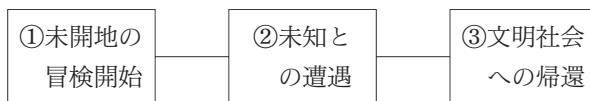
この短編は明らかに冒検物語群と間テキスト性を持っている。間テキスト性はさまざまな形態で文学作品に現れるが、ジャンルもその一つである。

Obviously, the texts in such an intertextual network may be related to each other for all sorts of reasons. Topical coherence may be one of them: this book, for instance, is related to a maze of other texts which are, in different ways, concerned with stylistics. Another strong bond between texts may be genre. Thus, literary texts may be related through a specific genre...⁽¹⁹⁾

(明らかに間テキスト性の網の中のテキストはあらゆる理由で互いに関係している。一貫したトピックもその一つである。例えば、本書は、いろいろな点で違ってはいるが、他の文体論のテキストと複雑に絡まりあった関係を持っている。もう一つの強い結びつきはジャンルである。文学的テキストは特定のジャンルによって関係している……)

冒検物語というジャンルの構成は概ね次のようになっている。(もし、このステレオタイプが破られた場合には、期待挫折 (defeated expectancy)⁽²⁰⁾が生じ、読者は新たな読み (間読み) を模索することになる。)

(図6) 冒検物語の構造



この冒検物語の構造にIモデルを適用すると、概ね次のようになる。

- ①第1段階 (Iモデルの1): 文学作品の認知/確認 (間テキスト性の起動→冒検物語と判断)。
- ②第2段階 (Iモデルの2): 言語レベルのずれ (生と死に関わる語彙の異常な反復)。概念レベルのずれ (出産と自殺という不条理)。
- ③第3段階 (Iモデルの3): 審美的感情群 (苛立ち、不安)。知的効果 (不条理の再解釈)。

まず第1段階で、読者はこの短編の冒頭部分から冒検物語の構造を期待して読むことになる。その際、ジャンル、場面設定、登場人物、視点が間テキスト性を呼び起こし、それによって作者と読者の間に虚構契約⁽²¹⁾が結ばれ、読者は自分自身の虚構世界を構築し始める。この第1

段階が、第2段階での未知との遭遇（言語表現レベルのずれや概念レベルのずれ）を受け入れ可能にする。第3段階の結末部分で、読者はこの短編が冒険物語であったことへの確信を深めると共に、自己の内面の省察を深める。

（第1段階：冒頭部分）未開地の冒険開始。

At the lake shore there was another rowboat drawn up. The two Indians stood waiting.

Nick and his father got in the stern of the boat and the Indians shoved it off and one of them got in to row. Uncle George sat in the stern of the camp rowboat. The young Indian shoved the camp boat off and got in to row Uncle George.

（第2段階：展開部分）未知との遭遇。4.1., 4.2.を参照。

（第3段階：結末部分）文明社会への帰還。

They were seated in the boat, Nick in the stern, his father rowing. The sun was coming up over the hills. A bass jumped, making a circle in the water. Nick trailed his hand in the water. It felt warm in the sharp chill of the morning.

In the early morning on the lake sitting in the stern of the boat with his father rowing, he felt quite sure that he would never die.

嶋（1975）は、この短編の評論の最終部分で次のように述べているが、彼の作品解釈の過程はIモデルと概ね同じである。（括弧内の1～3はIモデルの段階、①～③は物語構造の段階を示す。）

作中に盛られている精彩のある自然描写——（1, ①）インディアン部落へ行く湖上の暗黒の夜の闇に閉ざされた自然、そしてそれとは対照的な、（1, ③）帰路のその同じ湖上での、みずみずしい、生命の息吹に躍動する自然、（2, ②）帝王切開による出産の生々しい写実、あるいは肺腑をえぐるような、おそろしいインディアンの夫の自殺といった事柄のすべてが、（3, ③）ニックの内的経験の反映としてとらえられていることに注意しなければならないだろう⁽²²⁾。

5. おわりに

本稿は、文学性が間テクスト性による文学作品の認知を基盤とした言語表現レベルのずれによる審美的感情群の発生と概念レベルのずれによる既成概念の再解釈（再構築）の相互作用（interaction）によって生成されることをIモデルによって示した。このモデルによれば、なぜfound poem⁽²³⁾が、詩（つまり文学作品）として認知されないのか容易に説明できる。それは、

いくら言語表現レベルのずれによって審美的感情群を生成できたとしても、概念レベルのずれによる知的効果(既成概念の変容)を生成できないからであり、また読者自身の虚構世界を構築させるだけの間テキスト性が検出されないため、文学作品として認知されることが困難だからである。これと全く同じ理由で、新聞記事などが文学性を持たない理由も説明できる。

...the nature of the context of *literary discourse* is quite different from that of non-literary discourse in that it is dissociated from the immediacy of social contact.⁽²⁴⁾

(Italics in the original)

(……文学的言説の作り出す文脈の性質は、社会との接触という直接性から分離しているという点で、非文学的言説のものとは全く異なっている。)

人間の創造性の賜である文学性の解明はまだ緒に就いたばかりである。認知科学の発達によって、その研究が今後どのような進展を見せるのか非常に興味深い。

〔注〕

- (1) Shklovsky, V. 1965. Art As Technique. In *Russian Formalist Criticism: Four Essays*, ed. and trans. Lee T. Lemon and Marion J. Reis, 12. Nebraska: University of Nebraska Press.
- (2) Wales, K. 2001² [1990]. *A Dictionary of Stylistics*. London: Pearson Education. s.v. *poetic language, poetic function*.
- (3) Miall, D. and Kuiken, D. 1999. *What Is Literariness? Three Components of Literary Reading*. *Discourse Processes* 28(2): 121-125.
- (4) *Ibid.*, 121-125.
- (5) *Ibid.*, 123.
- (6) 内海 彰. 2007. 「認知修辞学における比喩の認知過程の解明」 楠見孝(編)『メタファー研究の最前線』403-420. 東京: ひつじ書房. 407.
- (7) Uモデルでの「豊かで多様な解釈」とは、関連性理論の弱い推意 (weak implicatures) のことである。関連性理論では、多様な弱い推意 (不確定な推意) が生成されることを、特に詩的效果と呼んで文学的テキストの特徴とみなしている。
Let us give the name *poetic effect* to the peculiar effect of an utterance which achieves most of its relevance through a wide array of weak implicatures. (Sperber and Wilson, 1995²: 222. Italics in the original.)
...poetic effects create common impressions rather than common knowledge. Utterances with poetic effects can be used precisely to create this sense of apparently affective rather than cognitive mutuality. ...Poetic effects, we claim, result from the accessing of a large array of very weak implicatures in the otherwise ordinary pursuit of relevance. (Sperber and Wilson, 1995²: 224)
- (8) 内海 彰. 2003. 「認知言語学や関連性理論は文学の認知研究に貢献できるか？」 小方 孝(編)『認知システムとしての文学—ワークショップの記録—』日本認知科学会テクニカルレポート 46: 150-158.
- (9) Cf. Stockwell, P. 2002. *Cognitive Poetics: an introduction*. London: Routledge. 79.

- (10) Sモデルの「スキーマ付加、スキーマ刷新」は、関連性理論における文脈効果の概念を適用したものである。関連性理論によれば、人間はいつでも、その人が頭に思い浮かべることの出来る知識=想定 (assumption) の総和である認知環境 (cognitive environment) の改善を願っている。認知環境を改善する作用は文脈効果と呼ばれ、①新しい想定 of 獲得である文脈含意 (contextual implication) ②不確実な想定 of 確実化である文脈強化 (contextual strengthening) ③誤った想定 of 放棄と正しい想定 of 獲得である削除 (abandonment of old assumptions) の3種類がある。

Contextual implications are contextual effects: they result from a crucial interaction between new and old information as premises in a synthetic implication. ...there should be two more types of contextual effect. On the one hand, new information may provide further evidence for, and therefore strengthen, old assumptions; or it may provide evidence against, and perhaps lead to the abandonment of, old assumptions. (Sperber and Wilson, 1995²: 109)

- (11) Stockwell, P. *op. cit.*, 79.
 (12) Miall, D. and Kuiken, D. *op. cit.*, 124.
 (13) *Ibid.*, 124.
 (14) Wales, K. *op. cit.*, s.v. *intertextuality, intersubjectivity*.
 (15) Lodge, D. 1992. *The Art of Fiction*. London: Penguin Books. 98-99.
 (16) 伊藤直哉. 1996. 「テキストと記号」 土田知則, 青柳悦子, 伊藤直哉. 『現代文学理論—テキスト・読み・世界』 東京: 新曜社. 67.
 (17) 土田知則. 2000. 『間テキスト性の戦略』 東京: 夏目書房. 72.
 (18) 嶋 忠正. 1975. 『ヘミングウェイの世界』 東京: 北星堂. 89.
 (19) Verdonk, P. 2002. *Stylistics*. Oxford: Oxford University Press. 63.
 (20) 予期したボタンが突然破られ、正常な進行から逸脱した時に起こる効果のこと。(大塚高信, 中島文雄 (編). 1982. 『新英語学辞典』 東京: 研究社. s.v. *defeated expectancy*.)
 (21) Cf. 青柳悦子. 1996. 「虚構言語行為論」 土田知則, 青柳悦子, 伊藤直哉. 『現代文学理論—テキスト・読み・世界』 東京: 新曜社. 95-96.
 (22) 嶋. 前掲書. 99.
 (23) 商品ラベルなどからとった散文の一段落をリズム単位に切るなどして並び換えて詩の形にしたもの。(村田徳一郎 (編). 1999. 『リーダーズ英和辞典』 東京: 研究社. s.v. *found poem*.)
 (24) Verdonk, P. *op. cit.*, 23.

〔引用文献〕

- 青柳悦子. 1996. 「虚構言語行為論」 土田知則, 青柳悦子, 伊藤直哉. 『現代文学理論—テキスト・読み・世界』 91-96. 東京: 新曜社.
 伊藤直哉. 1996. 「テキストと記号」 土田知則, 青柳悦子, 伊藤直哉. 『現代文学理論—テキスト・読み・世界』 62-67. 東京: 新曜社.
 内海 彰. 2003. 「認知言語学や関連性理論は文学の認知研究に貢献できるか？」 小方 孝(編) 『認知システムとしての文学—ワークショップの記録—』 日本認知科学会テクニカルレポート46: 150-158.
 内海 彰. 2007. 「認知修辞学における比喩の認知過程の解明」 楠見孝 (編) 『メタファー研究の最前線』 403-420. 東京: ひつじ書房.
 嶋 忠正. 1975. 『ヘミングウェイの世界』 東京: 北星堂.
 土田知則. 2000. 『間テキスト性の戦略』 東京: 夏目書房.
 Hemingway, E. *In Our Time*. Boni & Liveright: New York. 1925. Scribner: New York. 2003.
 Lodge, D. 1992. *The Art of Fiction*. London: Penguin Books.

- Miall, D. and Kuiken, D. 1999. *What Is Literariness? Three Components of Literary Reading*. *Discourse Processes* 28(2): 121-138.
- Shklovsky, V. 1965. Art As Technique. In *Russian Formalist Criticism: Four Essays*, ed. and trans. Lee T. Lemon and Marion J. Reis, 3-57. Nebraska: University of Nebraska Press.
- Sperber, D. and Wilson, D. 1995² [1986] *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- Stockwell, P. 2002. *Cognitive Poetics: an introduction*. London: Routledge.
- Verdonk, P. 2002. *Stylistics*. Oxford: Oxford University Press.
- Wales, K. 2001² [1990]. *A Dictionary of Stylistics*. London: Pearson Education.

(きったか しんいちろう 英米学科)

2008年9月22日受理